

精神疾患は自然種たりうるか

山崎真也

大阪府立大学大学院人間社会学研究科博士後期課程

本発表の課題は、統合失調症や双極性障害、解離性障害、自閉症・・・といった精神疾患の「疾患単位」(Krankheitseinheiten, diseases entities)が、金やアルミニウムや水、あるいは虎や犬、レモンやブナやカシワ、陽子や中性子を典型例とする自然種として認定されうるか否かを検討することにある。この作業を通して、精神医学の基礎に位置する疾病分類学(nosology)や診断学の根本問題を描出したい。

課題に着手するにあたり、先ずもって自然種概念が明確にされなければならない。自然種概念はもとより曖昧な概念であり、論者によってその意味するところが異なっているように思われるからである。そこで演者は Hacking に倣って、取り敢えず自然種の基本「原則」を「独立性(Independency)」に求めたいと思う。これは、事物、物質、有機体等々の種(kinds)が存在することは、自然についての事実(a fact about nature)であり、人間の心理学的ないし社会学的事実からは独立であること、あるいは事物を種に分類する際によりどころとなる差異(differences)が、人間の所産ではなく「自然によって作られている」ことを意味する。その眼目は、種(この場合精神疾患の諸疾患単位)を自然の側に実在論的に位置づけることであり、とりわけ本発表の目標からは相対主義的な「診断的ニヒリズム」(内沼幸雄)を回避することにある。

以上の自然種概念の包括的な特徴付けを前提した上で、次に、Bird の議論をヒントに、自然種をめぐる2つの立場を以下に定式化する。その際、同時に精神疾患での具体例や精神医学における分類の実践例をこの2つの枠組みに即して分析することで、精神疾患の疾患単位を自然種と考える場合に生ずる難点を同時に論述したいと思う。

第一に、(自然)種の記述的見解(the descriptive view of kinds)がありうる。これは Kripke によって否定されたことで有名である。つまり、「金」という一般名辞が、黄色の、光の下で輝く、王水中で溶ける・・・といった一定の諸性質(Locke のいう唯名的本質、また一般的に言う内包)の連言によって規定され、それが外延を選び出す、とする伝統的な見方である。

記述的見解は、Boyd、Dupré、Cooper らが想定するように、一様な自然法則を前提し、帰納的な予測・推理と因果的説明の成立を支えるものである(水、即ち無色透明で、科学式 H_2O で・・・な物体は、他の条件が同じなら100度で沸騰する[だろう])。同時に、演者としては記述的見解を支える基本的想定として、物の「類似性(similarity)」が読み取られていることを指摘したい。というのも、記述的見解によれば、種のメンバー(外延)を指定するのは諸属性の連言であるとされるが、二つの物質A・Bの諸属性が種同定の根拠とされる時、そこで実際に問題となるのは、二つの物質の示す属性それぞれの類似性(Aの透明性とBの透明性の類似)であるからだ。Quine も、人間の生得的能力としての類似性の知覚が、帰納的推理の根底をなすと述

べている。

だが、類似性を根拠とするが故に、種の記述的見解は危機にさらされる。Goodman は類似性が哲学的に無力だといって非難した。Quine も、類似性による分類から足を洗うことが学問の進歩の目印であるとした。その理由の主たるものは、渡辺の「醜いアヒルの子定理」に見られるように、要するに類似性の設定の仕方は人間の関心に高度に依存しており、蓼食う虫も好き好き的に種の設定が可能（類似性基準の恣意的設定と呼ぼう）であり、その限りにおいて本発表冒頭で提示した自然種の実在論的立場と抵触するからである。

とはいえ、重要な点は、同一種に属するメンバーが安定して類似の諸性質を法則的に示すことではないかという反論がある。Cooper はこの線に立って「類似した重要な諸性質」即ち「類似の定義的諸性質」の所有を自然種の要件とした。ではこれは現代精神医学の分類体系に妥当するか。具体例は発表の際に提示するが、精神疾患の場合、一方で定型例は確かに存在するものの、他方で、恐らくかなりの頻度で非定型例が存在することが論点となる。しかも、定型例でさえ予測が困難な場合がある。それ故、諸性質の恒常的な法則性を定立することは、完全に不可能とはいえないものの、恐らく著しく困難である。またとりわけ、不全例 (formus frustes) や境界事例においては、類似性設定の恣意性問題が先鋭な形で浮上してくる。発表では、ヒステリーにおける第一級症状の存在、内因性若年無力不全症候群、強迫神経症、挿話性緊張病などを題材に、症例間の類似性を根拠として、種の記述的見解に基づいて種を措定することの著しい困難について論ずるつもりである。

ところで、自然種の第二の立場は、種の本質主義的見解 (the essential view of kinds) である。Kripke-Putnum による言語哲学的考察が著名である。地球における水 H_2O と双子地球における水 XYZ は、両者の表面的な諸属性が完全に同一であっても、別の物質であり別の外延を持つとされる。その根拠は、科学の探究の中で発見された微細構造 (microstructure)、即ち化学構造の違いである。この微細構造が種を分ける本質である。科学者が当初調べ上げた金のサンプルが黄色だとしても、途中で白色の金が発見されるかもしれない。では、何がその白色の金の、サンプルとの同種性を保証するか。最初のサンプルと白色のサンプルにおける微細構造の絶対的な類似である。

この提案は、先の類似性基準の恣意的選択の問題に一定の制限をかけるが故に、有用である。しかし Bird も指摘するように、一体その本質たる微細構造が何であるかは不明瞭なままだ。微細構造＝核内の陽子数の「絶対的類似」や「同一性」を厳密に解すれば、同位体、異性体、同素体等の問題は解決できない。しかも同位体や同素体の問題は、決してトリビアな例外ではない。同位体の余分な中間子の数は、核分裂のような現象を説明する際に重要である。実は最近、精神医学の中でパラレルな問題が起きつつある。それは、統合失調症と双極性障害の遺伝的ファクターの共有である。

Bird も言うように、ここでは自然種の説明的役割 (explanatory role) が問題になっている。だが、基底的な微細構造と表面的な諸性質の関係は、精神疾患の場合、化学以上に複雑である。また、精神医学的研究の手順は、最初に問題含みの症候学的類似性による診断を下し、次にその微細構造を調べるというものだ。以上、精神疾患を自然種とするには多様な困難を孕む。その中で診断ニヒリズムを回避する方策を探る。